京都大学地域研究統合情報センターニューズレター No.15　2014年9月

Newsletter No.15

1 **2014年上半期の地域研ニュース**
ワークショップ　地域研究スピリッツの継承：石井米雄を語る
「災害対応の地域研究」シリーズの刊行開始

3 **地域情報学の最前線**

5 **共同利用・共同研究の現場から**
なぜ社会紛争が発生するのか？　メカニズムの解明と予防に向けた研究
ペルーにおける森林の違法伐採と事態改善に向けての活動

7 **共同研究ワークショップ**
世界のジャスティス

8 **インタビュー・研究室探訪 11**
インドネシア・アチェから調整の知を紡ぐ
― 災害と向きあう地域研究 ―

11 **たちばな賞 受賞にあたって**

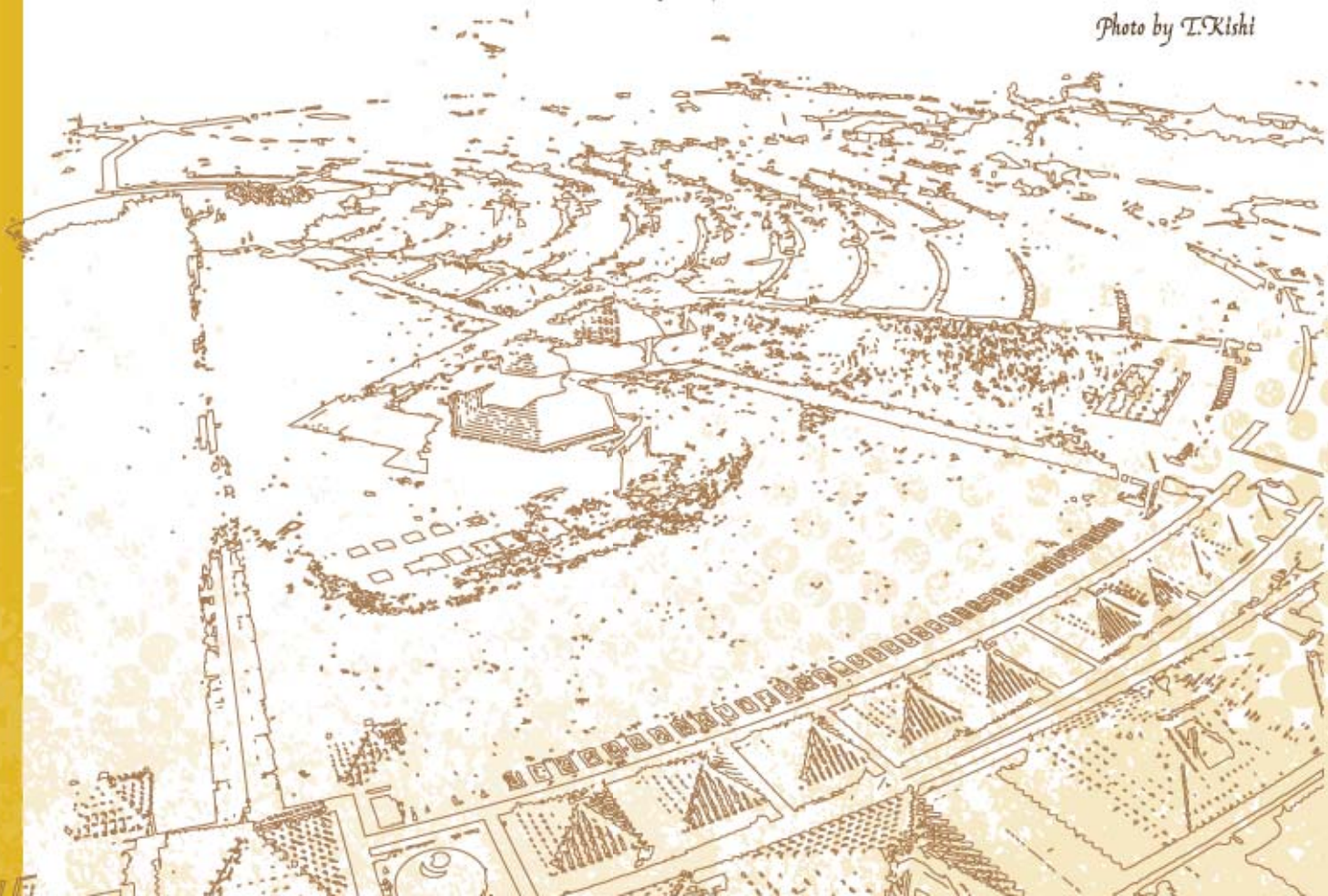
12 **旅紀行「旅をめぐる幾つかの背景**
―旅先での探索はいつ終わるのか？―」

13 **出版物の紹介**

14 **自著を語る**

15 **新刊紹介**
「マンガミュージアムへ行こう」
JCAS NEWS

Photo by T.Kishi



Center for Integrated Area Studies, Kyoto University

ワークショップ

地域研究スピリッツの継承：石井米雄を語る

2014年3月8日、地域研の「石井米雄コレクション」を一部公開するワークショップが開催されました。京都大学稲盛財団記念館の大会議室で4人の報告者による発表と討論、1階ピロティと3階小会議室にて、旅券、フィールドノート、映像資料を展示する「特別企画：遺品の展示と写真でみる石井米雄先生」を実施しました。80名の参集者がありました。

「石井米雄コレクション」とは、1965年から25年間東南アジア研究センターに在籍し、東南アジア史、上座仏教研究で知られる石井米雄・京都大学名誉教授（1929-2010）の蔵書（欧・和文各約4,000点、タイ語約2,000点を含む東南アジア諸語文献）約12,000点、映像写真資料、講義ノート、著作を準備したカード、生涯の旅券全冊、辞令、顕彰された賞状や勲章、座右銘、日誌、普段使いの手帳を含む資料群を指します。

生前に蔵書を寄贈したいとの意向を受けたのは2002年3月20日でした。最初に蔵書約8,000点が旧私宅（伊東市宇佐美）から地域研に届いたのが2009年2月26日。逝去される1年前のことです。その後ご遺族により直前まで使われていた書斎、神田外語大学、別宅に残った書籍や遺品が2011年3月に寄贈されました。

2009年から地域研は蔵書の書誌情報の遡及入力、目録のデータベース化、写真画像資料の情報化とコンテンツのシソーラス化に着手、バーチャル図書館と閲覧ナビゲータの開発を進めています。2010年度から地域研に発足した「地域情報学プロジェクト」（代表・柳澤雅之）の1プロジェクトとしても組み入れ、資料の整理と分析を進めてきました。

本コレクションは研究者の知的営みを浮き彫りにする宝庫でもあります。発表で柴山守（地域研）が示したように、著作物のキーワード検索とシソーラスは地域研究の主題とともに分析方法の変遷を映しています。それに多様なジャンルに跨がる蔵書群と重ねれば、地域研究をめぐる知の技法がみえてきます。また、旅券全冊は、地域研究者・石井氏の活動の時系列展開をみる基礎資料です。「特別企画」で星川圭介（地域研、現・富山県立大学）による渡航の分析結果が掲示されました。これに職業変遷を示す辞令、発表された著作物を重ねると知的生産の過程が顕われます。さらに、書くという作業には日誌という私的な記録から講義という、伝えるための構成法がみえます。ここに顕彰という人生のイベントも付帯します。

ワークショップでは、趣旨説明に続き4本の発表が行われました。寺田勇文氏（上智大学）の「上智大学の石井先生」では、京大退官後の1990年度から96年度までの、関西では知られない石井氏の教育活動が紹介されました。柴山「データでみる石井米雄先生：＜ひと＞と＜研究＞」は、著作リストから50年間の研究テーマの変遷をたどり、バーチャル図書館とキーワード閲覧ソフトを紹介し、日誌の分析から石井の日常での素顔にも迫りました。伊東利勝氏（愛知大学）の「千年王国運動と地域研究」では、石井氏の上座仏教圏の千年王国運動論を発展させてネイションや地域に回収されない民衆運動研究のあり方が論じられました。林「『パイドロス』と地域研究」は、蔵書の経緯、遺された言葉から人を介して言語と地域世界に迫ろうとした地域研究者の姿を示しました。討論では石井氏の多様な局面について議論が沸騰、その熱気は懇親会へと続きました。参集者にはコレクションパンフレットと写真や著作目録等を収めたDVDを配布しています。ご遺族をふくむ参加者、準備から当日の運営に尽力していただいた地域研支援室、教員・関係者に心よりの謝意を表したいと思います。

（林 行夫）

「災害対応の地域研究」シリーズの刊行開始

災害は日常生活の延長上の出来事です。私たちの社会は潜在的に様々な課題を抱えています。災害は、物を壊し秩序を乱すことでそれらの課題を人々の目の前に露わにし、社会で最も弱い部分に最も大きな被害をもたらします。壊れたものを直し、失われたものの代用品を与えて被災前に戻そうとすれば、被災前の課題も未解決の状態に戻すことになります。もとに戻すのではなく、被災を契機によりよい社会を作り出す創造的な復興でなければなりません。

災害の現場は様々な専門家が集まる協働の場でもあります。その機会をうまく捉えて創造的な復興に取り組むには、被災前からの課題を熟知する地域研究の視点が不可欠です。街並みや産業、住居などの復興は目に見えやすく、達成度を数で数えやすいのに対し、一人一人の暮らしや心理面を含む復興は目に見えにくく、数えにくいものです。災いを通じて人と人とが繋がるには、目に見えにくく数えにくい一人一人の復興の様子を読み解く力が求められます。

災害対応は一部の専門家に任せるだけでは完結しません。協働の輪の欠けた部分を繋ぐのは、社会のそれぞれの立場でそれぞれの専門や関心を持つ私たち一人一人です。災害対応の現場で何が起こっているかを知り、それをどう捉えるかを考える手がかりを示すことで協働がより豊かになることを期待して、「災害対応の地域研究」シリーズを刊行しました。

日本社会は今後、東日本大震災と原発事故からの復興に加え、他の災害や戦争を含む過去の出来事をどう捉えてどう臨むのかを含め、何重もの「復興」に取り組むことになります。しかも、その復興は日本社会のなかだけで考えて済ませることはできません。スマトラ（アチェ）とインドネシアを扱った第1巻、第2巻に続き、対象をアジアにひろげた第3巻『国際協力と防災』（牧紀男・山本博之編）、世界全体にひろげた第4巻『歴史としてのレジリエンス』（川喜田敦子・西芳実編）、そして日本に戻って考える第5巻『復興の物語を読み替える』（清水展・木村周平編）の刊行準備も進んでいます。

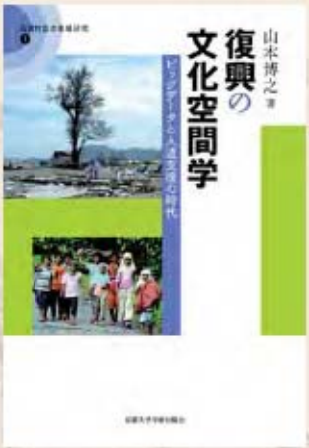
第1巻　山本博之『復興の文化空間学：ビッグデータと人道支援の時代』

スマトラ島沖地震・津波やジャワ地震を例に、新聞・インターネットから現地での見聞まで含む幅広い情報を地域研究者が分析し、時に防災や人道支援の専門家と協力しながら地域の形を読み解いていきます。災害に強い社会を構築するには被災後だけに留まらない時空間的に広い視野が必要です。記憶と物語、合意形成をキーワードに、スマトラから日本社会のあり方を考えます。

第2巻　西芳実『災害復興で内戦を乗り越える：スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』

約22万人の命が失われたスマトラ島沖地震・津波（インド洋津波）から10年。未曽有の自然災害と30年に及ぶ内戦という2つの「災厄」からの復興に取り組んできた人々の記録。災害がなぜ内戦を終結させ、内戦下の社会の亀裂の修復はどのように取り組まれてきたのでしょうか。国際人道支援の「実験場」となったアチェで、住まい、弔い、学術交流、博物館、映画などの多様な側面から、人々が災害に向き合い、乗り越えようとする営みを読み解きます。

（山本 博之）



地域情報学の最前線

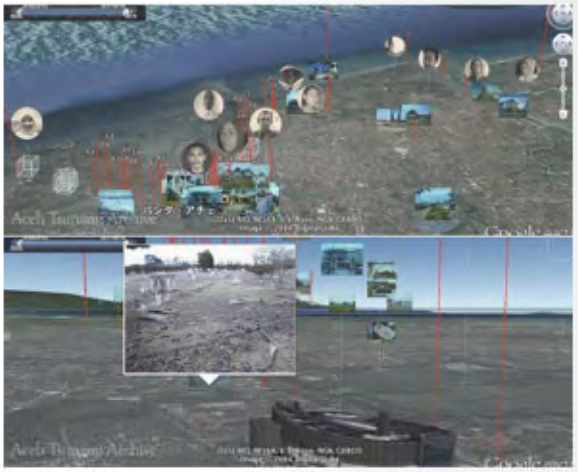
地域研の地域情報学プロジェクトと首都大学東京の渡邉英徳研究室では、データベースの可視化プロジェクトを共同で進めています。これにより、データベースの内容を視覚的に分かりやすく提示することが可能となりました。ここでは、最新の成果の一端を紹介いたします。

「アチェ津波アーカイブ」http://aceh.mapping.jp/

「アチェ津波アーカイブ」は、デジタル地球儀「Google Earth」を使った、インド洋大津波の多元的デジタルアーカイブズです。ユーザは、ズームイン・アウトやパン操作を用いて、デジタル地球儀上に再現されたバンダアチェの空を飛び回りながら、すべての資料を一覧することができます。

証言資料は顔アイコンで示されており、クリックするとバルーン内にインドネシア語・日本語併記で抄録が表示されます。さらにバルーンから、証言の元データにリンクされています。また、写真資料は空中のアイコンで示されており、クリックするとフォトオーバレイ、あるいはバルーンとして表示されます。

さらに画面左上のタイムスライダーを操作することによって、時系列に沿った絞り込み表示が可能です。Google Earth には過去の衛星画像も収録されているので、津波前後の変化、そして街が復興していくようすを、時空を越えて体感することができます。



位置情報に基づいて、アーカイブの資料を iPhone のカメラビューに重ねて表示する AR アプリも公開準備中です。バンダアチェでは、被災後 10 年近くが経過し、過去の被害のようすを想像することは、難しい状況にあります。この AR アプリの目的は、現在の風景に過去の資料を重ねあわせることによって、被災状況を実感を持って伝えることです。

地域研担当：山本博之・西芳実
首都大担当：渡邉英徳（准教授、地域研・客員准教授）、荒木佑介・菊本有紀・岸岡信伍（博士前期課程 2 年）、佐久間亮介（学部 4 年）

「フィールドノート・マッピング」http://fieldnote.mapping.jp/

「フィールドノート・マッピング」は、高谷好一氏によって収集されたフィールドノートの記録を、Google Earth 上にアーカイブするシステムです。現在のバージョンには、全記録のうち、インドネシアにおけるフィールドノートのデータが格納されています。

ユーザは、Google Earth をズームイン／アウトしながら、フィールドノートの内容を俯瞰的／微視的に閲覧することができます。さらに、タイムスライダーを操作することによって、膨大な記録を時系列で絞り込み、時空間における記録の位置を知ることもできます。

また、山田太造氏（東京大学史料編纂所）とのコラボレーションによって、テキストマイニング・ビジュアライゼーション機能も実装しました。さまざまな用語が含まれるフィールドノート記録を共起する頻度に応じて 30 種に分類し、色分けして表示します。この機能によって、各地域における用語の使われ方の傾向が、ひと目で把握できるようになっています。

なお、手書きの記録であるフィールドノートには、詳細な緯度経度情報が付与されていません。従って、記録と当時の地図とを見比べながら、位置の推定を行う必要があります。位置の推定後は、緯度経度情報を含むテキストデータを作成し、サーバにアップロードするだけで、コンテンツを更新することができます。

このシステムは、フィールドノートに含まれる他の地域の記録はもちろん、他分野における地域情報アーカイブにも応用可能と考えています。

地域研担当：柳澤雅之
首都大担当：高田百合奈（博士後期課程 2 年）

「寺院マッピング」http://temple.mapping.jp/

「寺院マッピング」は、東南アジアにおける寺院と僧侶の移動関係を視覚化するプロジェクトであり、Khong Chaim の寺院データと、2001 年から 2010 年の間にこれらに関わった僧侶のトラッキングデータを扱っています。今回は、寺院の情報と僧侶の移動履歴を表現する Google Earth インターフェイスと、データを追加・更新するためのシステムを制作しました。

Google Earth インターフェイス上の寺院アイコンをクリックすると、寺院の拡大写真が表示されるとともに、その寺院を訪れた僧侶の移動履歴をあらわすラインが、Google Earth の三次元地形上に描画され、実感をともなって表現されます。さらにユーザの興味を惹きつけるために、特定の僧侶の移動履歴を年代別に表示するデモコンテンツも用意しています。

このシステムでは、寺院と僧侶の情報が格納された XML ファイルを変換し、Google Earth 用の KML ファイルを生成することができます。生成された KML ファイルをサーバにアップロードすれば、コンテンツが更新されます。また、数行のコードを javascript に書き加えるだけで、新たな地域のデータを追加することができます。

今後、Khong Chaim 以外のデータも網羅することで、地域ごとの寺院と僧侶の移動関係の比較が可能になると考えています。

地域研担当：林行夫
首都大担当：原田真喜子（博士後期課程２年）

「センデロ・ルミノソ・マッピング 」http://peru.mapping.jp/

「センデロ・ルミノソ・マッピング」は、ペルーで 1980 年に武装闘争を開始した反政府武装集団「センデロ・ルミノソ」の活動履歴を可視化するコンテンツです。この可視化コンテンツでは、活動のカテゴリー別に色分けしたアイコンを、Google Earth に時空間マッピングしています。

ズームイン・アウトやタイムスライダー操作によって、センデロ・ルミノソの活動の推移を俯瞰することができます。また、地形の強調表示機能も備えており、山岳地帯における活動の実態をイメージしやすくなっています。今後は、ジオコーディングの精度を高め、古地図を重層表示するなど、機能の向上をはかる予定です。

地域研担当：村上勇介
首都大担当：渡邊英徳、髙田百合奈（博士後期課程２年）、荒木佑介・岸岡信伍（博士前期課程２年）

その他の事例

渡邊英徳研究室では、ソーシャルメディア由来の災害情報を活用した「台風リアルタイム・ウォッチャー（http://typhoon.mapping.jp/）」や、東京オリンピック 1964 年大会をテーマにした多元的デジタルアーカイブズ「東京五輪アーカイブ 1964－2020（http://1964.mapping.jp/）」などにも取り組んでいます。

（渡邊 英徳）

共同利用・共同研究の現場から

地域研では、全国の共同利用・共同研究拠点として、国内外の地域研究機関から課題の要請や助言を受けつつ、2010～2015年度の6年間の予定で共同研究を実施しています。2014年度においては、4つのプロジェクトの下、総括班3、複合共同研究9、個別共同研究28、総計40のユニットを配置しています。各ユニットにおいては、限られた予算の中、科研等の各種プロジェクトとも連携を図りつつ、多彩な活動を展開しています。ここでは、幾つかのユニットをピックアップし、研究成果の一端を紹介します。

なぜ社会紛争が発生するのか?

メカニズムの解明と予防に向けた研究

ラテンアメリカ各国の社会においては、階層的・地域的な格差や貧困の問題が長期にわたって存在しています。そうした構造的な格差と貧困の問題が、1980年代から90年代までのネオリベラリズムの時代に増幅される現象が、各国で観察されました。そうした状況を背景として、社会紛争がいずれの国でも増加する傾向があらわれています。国によっては、社会紛争の増加が、ガバナビリティを大きくゆるがす焦眉の課題となっています。

以上の問題関心にもとづき、複合研究ユニット「ポスト・グローバル化期における国家社会関係」では、ラテンアメリカを主要なターゲットの一つとして捉えています。まず、ラテンアメリカにおける社会紛争の主要な事例（ボリビア、コロンビア、メキシコ、ペルーなど）を比較研究する作業を行い、社会紛争の原因と過程について総合的に分析しています。そして、その知見を、地域研が進めている社会紛争のデータベースとマッピングシステムをもちいて検証しています。そして、その結果をもとに、社会紛争の克服のための提言や、社会紛争の予測・予防のためのシステムや社会制度への手がかりを探究したいと考えています。

社会紛争のデータベースとマッピングシステム（本号3-4ページ参照）では、ペルーの事例を対象として整備と構築を進めています。基となっているデータは、同国の独立国家機関である人権擁護局（Defensoría del Pueblo）が2004年より毎月刊行している社会紛争報告です。このデータの最大の特徴は、紛争終結のデータが含まれていることと言えます。

通常、社会紛争の分析には、イベントデータと呼ばれる、新聞を中心とする報道機関が報じた社会紛争を集めたデータベースが使われます。データ入手の容易さやデータを長期間にわたって集められる点などから、イベントデータが用いられます。ただ、報道機関というフィルターを介するため、報道機関が関心を寄せなかった紛争（例えば、地域的に限定された小さな紛争）が漏れている可能性もあります。そして何よりも問題となるのは、紛争が終結する過程について、報道機関が関心をむける例は、発生事例に比べると、格段に少なくなる点です。そのようなイベントデータと比較すると、人権擁護局のデータには、紛争が沈静化ないし終結する過程についてもデータが含まれています。

アンデス高地における選挙運動
（サッカーボールをシンボルとする政党の運動）

この研究ユニットでは、そうした社会紛争データベースとそれに基づいた社会紛争マッピングシステムを用いて、社会紛争にかんする総合的な分析を実施し、紛争発生の原因や背景を探究した先行研究の再検討を行っています。また、原因分析にくわえ、社会紛争の沈静化、終結の過程についても分析し、社会紛争の克服に向けての提言、将来における発生の予測や予防のためのシステムや社会制度について考察することも試みたいと考えています。データをあらためて検証してみると、紛争が多発している地域と比較的紛争がすくない地域があることが明らかとなってきています。そのような違いが生ずる原因は何か、可能であれば、フィールド調査を実施し、現地の視点から考察を行っていく予定です。

リマ郊外の砂漠に広がる貧困層集住地

（村上 勇介）

ペルーにおける森林の違法伐採と事態改善に向けての活動

複合研究ユニット「地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦」では、環境問題という極めて重要な国際問題に取り組んでいます。天然資源の乱開発を招く大きな原因は、法的コンプライアンスの欠如、つまり、法律が順守されていない点にあります。たとえ、各国政府が天然資源の開発に関して法律を定めていたとしても、悪質な業者がそれを無視していては意味がありません。特に、象牙やサイの角、金やダイヤモンド、熱帯材といった資源について問題が発生しています。

この複合ユニットの傘下に位置する個別ユニット「熱帯森林利用のローカル・ガバナンスの可能性に関する地域間比較研究」では、主としてエクアドル、ペルー、ボリビアのアマゾン地域における林業の法的規制について調査を行っています。このプロジェクトでは、2007年より地域研と提携関係にあるインドネシアの国際森林研究センター（CIFOR）と一緒に活動を行っています。今年7月7～12日には、双方の研究者がインカ帝国の首都であったクスコに集まり、ワークショップを開催しました。

違法材とは、免許や許可の取得や森林管理計画の提出といった適切な手続きを経ないまま伐採され取引された木材のことを指します。違法材は森林を破壊し、適法材の価格を不当に下げ、政府の税収を減少させるだけでなく、時には反政府組織を利することにもなります。業者だけが問題なのではありません。賄賂の見返りに書類を偽造し、結果として違法材の流通を助ける役人もいます。国際社会では、こうした違法材の取引に対してより厳しい措置を取ろうとする動きが出てきています。例えば、アメリカの改正レイシー法（2008年）やEUの「森林法の施行・ガバナンス・貿易（FLEGT）」に関するアクション・プラン（2003年）が挙げられます。こうした措置により、ペルーのような熱帯雨林を有する国家は、大きなプレッシャーを受けるようになっています。

しかしながら、国外への大量輸出を狙う大企業だけが違法伐採を行っているわけではありません。クスコのワークショップでは、大企業よりもむしろ、小規模業者によって伐採される違法材が多いという点が指摘されました。これらの小規模業者は、主として国内市場向けに森林を伐採し、家具製品を生産しているのです。使われている木材の大半は低品質であり、作られる製品も低・中所得者向けのものです。仮に小規模業者の側で合法的に森林開発を行いたいという意思があったとしても、その大半は、大企業のように正規の手続きを経て伐採の許可を得るだけの余裕がないというのが実情です。残念ながら、ペルー政府は、こうした現実に対して適切な対策を打ち出すことができていません。

現在、今回のワークショップで得られた知見についてレポートを準備中ですが、そこでは、ペルー政府に対して実施すべき政策と法改正についての提言も行う予定です。この研究ユニットとしては、ペルー政府との連携も積極的に行い、事態改善に向けて更に活動を進めていきたいと考えています。

（ウィル・デ・ヨン）

国内消費者向けの木工所（ペルー）、撮影者：Walter Cano (CIFOR)

川から丸太を引き揚げる先住民コミュニティのメンバー（ペルー）、撮影者：著者

共同研究ワークショップ

世界のジャスティス

4月26日、地域研にて共同研究ワークショップが行われました。タイトルは「世界のジャスティス」。善・悪といった二項対立を導く価値観としての「正義」ではなく、他者との共存や調和を導く叡智のメカニズム－それがたとえ既存の価値観では不正義であったとしても－のありようを「ジャスティス」として、各報告者の専門分野からできるだけ具体的な議論を引き出してもらうことがテーマでした。

最初の平野（野元）美佐報告では、アフリカ・カメルーンの都市と農村を結んで維持される首長制社会が論じられ、次の西芳実報告では、震災後のスマトラの社会で見られた笑顔に対するとまどいと、その笑顔がもたらす建設的な意味が提示されました。次の王柳蘭報告は、北タイを生きる人々の、変容する（美味しそうな！）食文化が紹介され、それを柔軟に受容したり提供したりする人々の姿が希望をもって語られたことが印象的でした。続く星川圭介報告では、タイの洪水の際に人々が取り得るべき選択肢をめぐる対立が、実は「それぞれの科学」の対立であったことが論じられ、最後の帯谷知可報告では、ウズベキスタンの女性たちのベールを対象とし、過去の写真などの視覚資料を用いてその変遷が示されました。イスラム化やナショナリズムなどと絡む現代的な現象としても興味深い事例でした。

コメンテーターは、昨年『人生で大切なことは倫理の教科書に書いてあった』（宝島社）を上梓された河合塾の公民科講師・河合英次氏、南米の都市社会学をご専門とされている上智大学の幡谷則子氏、そして熱帯の公衆衛生学のスペシャリストである長崎大学の門司和彦氏の3名に、来ていただきました。

これだけの素材、コメンテーターを集めて盛り上がらないわけはありません。議論は大いに白熱しました。企画者たちが用意した、ジャスティスという価値観をめぐる調和のメカニズムを考察するという方向を突き破って、最終的には普遍的な正義の存在の有無など、正義そのものの核心へと、磁力にひきつけられるように議論が進んでいきました。他者との共存や調和のメカニズムを分析するのは、やはり客観的な議論であり、地域との距離は遠く感じられます。むしろ地域研究者は地域に分け入っていく以上、自らの立ち位置も当然問われるわけで、だからこそ、正義そのものの存在やあり方を問うというシンプルな議論の方が、共有できる切実なトピックとしてあるのだと感じました。

このように、その場でしか得られない議論が生まれたことは、まさしくワークショップという場所にふさわしいものでした。筆者ら企画者による説明不足を超えて、テーマの深淵にまで届くような言葉をなんとかして紡ごうとして下さった、発表者、コメンテーターの方々のおかげです。本当に感謝申し上げます。また、参加者の方々からも多くの質疑が出たことも、大変ありがたく、印象的でした。来年も必ず白熱したイベントとなるはずです。ぜひご期待下さい。

（谷川 竜一）

インタビュー・研究室探訪 11

インドネシア・アチェから調整の知を紡ぐ
― 災害と向きあう地域研究 ―

「研究室探訪」では、地域研に所属する地域研究者に、自身の研究テーマやそれに対するさまざまな思いを、インタビューを通して縦横に語っていただきます。第 11 回は、インドネシアのアチェを主なフィールドとしつつ、災害と人間社会のかかわりを探求しておられる西芳実准教授（地域研）です。

●話し手・西 芳実（地域研・准教授）

×

●聞き手・谷川 竜一（地域研・助教）

■子供の頃の夢――「山登りと本作り」

谷川●研究とは少し異なる角度から質問を始めさせて下さい。西さんの子供の頃の夢は何だったんですか。

西●小学校の卒業文集に「山の空気を活力に、ものを書く人になりたい」って書いた記憶があるんですよ。私の家族は山登りが好きで、山に連れていってもらうのが好きだったのと、文章を書くのが面白いだろうなって思ってたからですけど。

谷川●日常的に何か書いていたんですか。

西●それがまったくなくて。読むのはすごく好きでした。ルパンの推理ものとか、大河ドラマで徳川家康をやっていたので山岡荘八の原作を全巻読んだりとか。本を読むたびに世界観が変わっていくのがすごく楽しくて。

谷川●小学生で山岡荘八を？ しかも、世界観といったメタな部分を楽しめたのはすごいですね。誰かの影響ですか。

西●母が本好きでうちに本がたくさんあって、何でも読み放題だったっていうのはあると思います。母は大学を出て、ちょっと仕事をしていたけど、その頃はうちに入っていました。でも、はじめは祖母の影響ですね。祖母の話を聞くのが大好きでした。祖母は新潟から東京に出てきて、関東大震災のときに看護師をしてました。女も男も関係なく学問を身につけさせたいって思いがすごく強くて、4 人の子供をみんな大学に入れたんです。

谷川●関東大震災の話も直接聞いていたんですか？

西●聞きました。子供の頃、一緒の布団に入りながら聞いたような感じで。火事のなか大八車で救護活動が大変だったとか、兄が迎えに来てくれて嬉しかったとかいう話くらいですけど。

谷川●それは子どもには、恐い話ですね。体験談は本以上に引きこまれますしね。中学校に入ってからはいかがでしたか？

西●もちろん本は好きで、河合隼雄とかを読んでたかな。童話の後ろにどんな物語が隠れているかとか。

■高校生―― 時代の空気は「国際化」

谷川●中学生で河合隼雄を？ じゃあ高校では何を読んでたんですか。

西●本から世界に目が向くようになりました。当時は国際化が一大ブームで、国際的な仕事がしたいなって。昭和が終わって、冷戦も終わって、世界が動いてるという意識を持って大学に進学しました。

谷川●その頃は大学で国際関係論などがはやっていましたね。

西●そうなんですけど、受験から解放されて、1 年生のときにワンゲルに入ったんです。うちには登山の装備があるし、山には小さいころから行ってるからある程度やってけるだろうと思ったけど、もう大変で。体力はないし、男の子ばっかりだし。性格も何もかも変わったかな。何でもきちんと折りたたんで片づけないといやでしょうがなかった性分が、全然気にならなくなったりとか。

■インドネシアへ―― 政変のさなかで暮らす

谷川●インドネシアとはどんな出会いを？

西●母の兄が1960年代にインドネシアに赴任して、インドネシアの人と結婚してそこで家庭を作っていて、一番身近な外国がインドネシアだったんです。家にもインドネシアのお面があって、夜中に目が覚めると恐くてトイレにいけなかった（笑）。それと、学年が上がっていってワンゲルの運営に悩んだ時期があって、その頃にインドネシアに関する論文を読んだら、いろんな民族の人たちがいて、いろいろ問題もあるけれどインドネシアっていう旗をみんなで掲げて何とかやっていこうと工夫してるという話で、そういうことを学びたいって思ったんです。ところが、みんな仲良く暮らしているはずのインドネシアで、アチェだけがいやだと言って武器を手に取って異議申し立てをしていた。アチェの人たちの気持ちが知りたいと思って文献を読んだけれど、そういうのは現地で暮らしてみないとわからないよと先生方に言われたんです。それで96年頃、大学院の博士課程のときにアチェに行ったんです。

谷川●現地の言葉は勉強していたんですか。

西●読むのだけ。言葉もよくできない状態でいきなり現地に入っちゃったから、行って1年ぐらいはぼうっとしてました。毎日テレビを見て、ペルばらとかをインドネシア語の字幕つきで見るみたいな感じで、とにかくテレビをいっぱい見て言葉を覚えて、新聞を毎日読んでって。現地に行けばいろんな人にインタビューできると思ってたけど、そんなに簡単に見つからない。対立の原因とか、昔のことを聞こうと思っても、みんなけっこう忘れちゃってるんですよ。歴戦の勇士たちもいいお年になっていましたし。そんなこんなで、とにかくよく遊びよく食べよく喧嘩をしみたいな感じで暮らしてるうちに1998年のインドネシア政変になりました。アチェの人たちも右往左往して、学生はこう動き、議会の人はこう動き、独立を要求していた人たちは外国から帰ってくるとかいうのを見ながら、会える人全部にとにかく会って話を聞いてました。

にし　よしみ●専門はインドネシア地域研究、アチェ近現代史。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学。博士（学術・東京大学）。同助教、立教大学AIIC助教等を経て2011年4月より現職。主な業績として『災害復興で内戦を乗り越える：スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』京都大学学術出版会、2014年など。

谷川●それが何年ぐらいまでですか？

西●99年までいたかな。アチェでは分離独立運動がどんどん盛んになっていて、そのことを書いてほしいっていう依頼が日本からたくさん来たんです。みんなが知りたがっているのは独立か統合かっていう結論だけど、それぞれの勢力が今まさにいろんな交渉をしてるわけで、それをどんな枠組みで書けばいいのか悩みました。帰国するといろんな人が話を聞きに来てくれて、細かいことを知ってるから話をすればなんとなく喜んでくれるけど、それではやはり論文にはならなかった。今起こっていることを位置づけるにはやっぱり経緯というか歴史を知らなくちゃいけないし、アチェだけじゃなく東南アジアに関する論文をたくさん読もうって思って、アチェのウォッチは続けながら、東南アジア研究の基礎的な論文を一生懸命読んでました。そこに津波が来たんです。

■津波―― 地域研究者の情報発信

谷川●2004年でしたっけ。

西●12月です。津波で様子がガラッと変わりました。平和構築や国際協力の専門家以外の人たちがアチェのことを知りたがって、それにどう情報を発信すればいいのか毎日考えました。津波の前、同年代の友達がアチェに何人もできて、彼らは一生懸命にアチェの対立を仲裁しようとして、独立派ともインドネシア政府とも違うアチェを作りたいってすごく頑張っていたんです。イスラム寄宿塾の若手の指導者とか、地方政府に入ろうとしてる優秀な若手とか。心情的に彼らを後押ししたいっていうか、その活動をみんなに紹介したいと思っていて、伝え方をいろいろ工夫しました。

谷川●その成果が2014年に出版された『災害復興で内戦を乗り越える』ですね。この本に至る経緯も教えてもらえませんか？

西●津波が起こった当初、みんなアチェの現地の情報を知らないで支援に行くじゃないですか。でも、現地の情報を知っていたら、きっと支援にもプラスになるって思って。研究者個人はせいぜい身のまわり50メートルくらいしか手が届かないなかで、他に何かできることがないかなと考えながら、現地語の新聞記事を翻訳して紹介しました。そこから災害対応の研究に大きく舵を切って、9年間の記録をまとめたのがその本です。

■墓標なき慰霊―― 地域の知恵を汲み取る

谷川●僕はこの本を読んで、やや軽い言い方ですが、良い意味でガイドブックにもなると思いました。

西●ガイドとして読んでほしいっていう気持ちは確かにあって、だからふつうの学術書とちょっと違うんです。データベースっぽいというか、トピックごとにどこから読んでもいいようにしてあります。震災以降にアチェに関わる人が増えて、アチェと関わって断片的に思っていることがあると思うけれど、その断片のまわりをもうちょっと広げてほしいなって思っていました。だから、まず断片で引っかかって、それからほかの部分も読んでくれたらって思っています。

谷川●この本で面白い点はたくさんあって、たとえば「墓標なき慰霊」のところで、目の前にあるのが誰の遺体かわからなくても、それを最寄りの集団埋葬地に埋葬するという行為をそれぞれの人がすれば、同じようにどこかで誰かが自分の愛する人を埋葬してくれるはずだって書いてありました。西さんはそこから人間に対する信頼が生まれているって読み解いていて、それがすごくいい。対比して思い浮かぶのは国家に尽くした無名戦士の墓で、僕はああいうのは「お前もこのように死ね」みたいに受けとっちゃう。墓標がないアチェの墓は、死に方じゃなくて生き方を説く見方につながっていくように感じます。

西●アチェの場合は、無名戦士の墓のようにも見えるけど、どこに位置づけられているかが決定的に違います。インドネシアという国のための犠牲者としては扱われてなくて、あえて言うならばアチェということになるんだろうけど、でも「アチェらしい装飾」のようなものはなくて、むしろ人類社会に開いちゃってるところがあります。無名戦士の墓に似てるけど、帰属する先が限定されておらず、全世界の津波犠牲者の慰霊の場になり得る設定になっている。そこは大事なところだと思っています。

谷川●自分も埋めたから誰かも埋めてくれている、といった想像は、自分と死者の間に第三者を絡ませることで、死者を弔い生者をいたわる社会――つまり公共性が立ち現れているような気がしました。このインタビューで、子どもの頃の夢からお話をうかがいましたが、こうしたいくつもの世界や眼差しを往復する姿勢は、おばあちゃんと一緒の布団でお話を聞いているときから、震災前・後のアチェまで、西さんが常に話をする人に寄り添ってきたからこそ、出て来た見方のように感じます。

西●そうかもしれませんし、地元の人たちが世界の情報をどう受け止めて、目の前のことがらをどう処理してるのかを、表の顔や裏の顔やいろんな顔を見てきたからかなって思います。テレビのニュースを見て感想を言ってるのを聞いたり、お客さんがいる間はこんなふうに話したけど帰ったらこんなふうに言ってたとか、そういう１つ１つを見てきたことが大きいんだろうなって。

■メッセージ―― もっと地域研究を

谷川●一方で、その見聞きしてきたお話をそのまま伝えるのではなく、何かしらの希望へと読み換えていかれますよね？

西●地域研究者は自分のことを研究対象に投影していると私は思っています。私でいえば、アチェのいいところもだめなところもけっこう自分と重なっているところがあって、だからアチェの人たちのことを意味があるように理解したいっていうのは、至らないところも含めて自分のあり方を救いたいっていうところがあるんです。たとえば、アチェは外から文物とか思想が来ると見境なく掴んじゃうところがあって、独立だ民族紛争だって言えばみんなついて来ると思えば一生懸命にそれをやっちゃうとか。それには善し悪しの両面があるけど、私自身にもそういう側面があって、ほかのみんなが駄目だって言っても、もしかしたらそこにとんでもない知恵が隠れてるかもしれないっていう思いがあります。研究が自分に跳ね返ってくるっていうことは強く意識しています。この人たちのことをこう書いたら返す刀で自分も同じ基準で評価されるって。日本で暮らしているとアチェとは全然関係ないと思うかもしれないけど、いろいろな産品を通じてアチェの人と自分たちの暮らしが影響を及ぼしあってるということもあります。それに気づくと、もう他人ではいられないっていうか、ある意味で自分もアチェに関して当事者だっていう思いが出てくるはずです。

たにがわ　りゅういち●専門は近現代建築史。東京大学にて博士号（工学）取得後、東京大学生産技術研究所を経て 2012 年 4 月より現職。主な業績として「東アジア近現代の都市と建築：建築・都市に織り込まれた帝国・国・社会」和田春樹ほか編『岩波講座　東アジア近現代通史　別巻　アジア研究の来歴と展望』岩波書店、2011 年など。

谷川●興味は尽きませんが、今後どんな研究に取り組んでいきたいかを教えてください。

西●アチェの人たちが経験したことや細かな知恵をいろんな人に知ってもらえればと思うので、そういう研究をしてアチェの本が書けたらと思っています。近い話で言えば、『災害復興で内戦を乗り越える』は「災害対応の地域研究」シリーズの第２巻ですけど、私は第４巻も担当しています。第４巻は、自然災害だけでなく戦争や事件･事故も含めて、20 世紀の人類社会の営みを地域研究的な視点で捉えてきた先生たちに書いていただく予定です。

谷川●それは楽しみですね。最後に読者にメッセージをお願いします。

西●社会は、体制のなかでいろんな工夫をして、辛酸をなめながらも微調整する人たちがいるからうまくまわっています。それなのに大きな場を壊したら何にもなりません。それぞれがいろいろなものを捨ててきているので全員がハッピーというわけではなく、自由でない部分もあるけど、それを補ってあまりある良い点があるからみんなでそれを選んだはずです。それなのに、作ったときの苦労を忘れて、目の前にある嫌なところは全部壊そうとするのはいかがかと思います。苦労して自分の身を削りながら、ときに我慢もしながら、なんとか場を維持して、だからといってそのせいで無理をして自分を殺してしまうところまではいかないようにしながら場を作る楽しさや意味を伝えていきたいと思っています。

谷川●今日はどうもありがとうございました。

たちばな賞 受賞にあたって（王 柳蘭）

このたびは、第６回京都大学たちばな賞（優秀女性研究者賞・研究者部門）を受賞し、大変うれしく光栄に存じます。3月3日のひなまつりの日が恒例の表彰式になっていることを松本総長から伺い、女性をエンカレッジするための特別の日が国立大学でも整えられていることに強い感動を覚えました。今年は、研究者部門と学生部門それぞれ17名と12名の応募の中から、たちばな賞と奨励賞も加わって、合計4人が表彰式に参加しました。また、ワコールの協賛をえて、副賞をいただくことができました。ここに至るまで、紆余曲折のなか研究を支えてくださった亡き恩師、先生方、研究仲間と家族には感謝の念に堪えません。本当にありがとうございました。

この受賞によって励まされたことは、現在続けている研究テーマ「アジアにおける中国系ディアスポラと多元的共生空間の生成」が他分野からも評価と理解が得られたということです。これまで自分の出自に根付いた多文化性に問題意識をもって人類学、地域研究を行ってきましたが、受賞のスピーチでは、移民という越境する人の存在形態は、同化や差別といった否定的側面だけではなく、異なる環境に適応し自らの文化を加工することで、文化社会への多様性の開花とその維持に大きく貢献している点を強調しました。また、たちばな賞をきっかけに、移民問題にふだんは関心をもっていない人びとに知的好奇心のみならず、日本を含めた身の回りの問題として認識してもらうことの重要性に気づきました。自分自身の研究を外側からみつめなおし、さらには他者へ学問をアウトリーチする方法について再考するきっかけになりました。

また、受賞に関連して評価をいただいたのは、地域研究コンソーシアム（JCAS）の社会連携の一環として2012年から開始した「女性地域研究者のライフ・キャリアネットワーク」の活動です。活動のきっかけは、大学での助教時代に２人の子どもを出産した経験とその後第３子を産み育てながら研究生活を続けてきたなかで自分自身が感じたことや悩みをプライベートな次元で閉じ込めず、同じ経験をした先輩研究者と今後似たような経験をすると思われる次世代の研究者も含めた女性同士の交流と情報交換を通して、ゆるやかなネットワークをつくりたいと思ったからです。これまで先輩女性研究者の話を聞く会や、子ども学や保育の専門家との座談会、日本学術振興会特別研究員RPD対策会などを開催してきました。また、最近では地域研究者の枠を越えて医学や数学、災害など他分野の女性研究者と交わりをしています。分野を問わず、フェーストゥフェースの情報交換をするなかで、研究や生活の行き詰まり感を笑いのなかで解消したり、女性が直面しがちな困難を生きぬく知恵や勇気を与えられたりしています。そもそも参加者はそれぞれ専門分野とはかけ離れた活動をしているわけですが、女性のライフとキャリアという関心を媒介にして話の接点をもつことで、互いに学際的な研究話題を共有するきっかけをもつことができます。その結果、話題は女性問題に限定されず、社会の矛盾や階層、宗教観、精神医学など、予期しないところでトピックが広げられつつあります。こうした活動を豊かに広げることができれば、文理融合や学際研究という冠を掲げなくても、好奇心と問題意識をもちよった女性や男性が互いに切磋琢磨できる研究の場、社会活動の場が自ずと生まれ、女性のライフやキャリアといった限定的な問題意識を越えて人的関係のみならず広い視野も得る機会になるのではないでしょうか。

今後はこの受賞を励みとして、文化多様性としての移民、越境問題について学問的に精進するのみならず、女性研究者支援のネットワーク作りを男女相互の理解によって粘り強く展開したいと思います。

第６回たちばな賞表彰式（2014年３月３日・京都大学医学部芝蘭会館稚園ホール）
著者は右から２番目

旅紀行

旅をめぐる幾つかの背景

═ 旅先での探索はいつ終わるのか？ ═

アンドレア・フロレス・ウルシマ（漆間）
地域研研究員。専門は建築・都市計画史論

私が初めてカメラを手にしたのは17歳の時でした。日本人である祖父がブラジルに移住し、初めて日本に里帰りしたときに買ったカメラ、キヤノンFXがそれです。私が親元を離れて大学に入学した時に母が渡してくれた思い出の品でもあります。残念ながら、このカメラは、私がウルグアイを旅行した際に盗まれてしまいましたが、それまでは旅の良き相棒であり、祖父の過去の旅について思いを馳せることもできました。

私の祖父、漆間ヒサオは、1936年、両親および6人の兄弟と共に鹿児島から「新世界」へと旅立ちました。18歳の時です。ブラジルでは当初、農業に取り組みましたが、その生活は過酷であり、数年後には曾祖父が亡くなります。曾祖母は家族を連れてサン・パウロに移り、「天国」という名の通りにあった小さな家で新しい生活と、同時に、小さなラジオ工場を始めました。約4平方メートルしかない一つの部屋が、後にブラジル初となるカーラジオ・メーカーの発端となりました。

大阪万国博覧会（1970年）の際に日系人のマリア・リジア（祖母）とヒサオ（祖父）が日本を訪れた時の写真

最初は各戸を回って売り歩いていた家業は、1960年代に急速に成長しました。ブラジル人の労働者たちは、ヒサオという名を発音することが難しかったので、「カルロス」という名で祖父を呼ぶようになりました。ヒサオは口数が少なく、ポルトガル語も得意とは言えなかったのですが、そうした点はビジネスの障害とはなりませんでした。会社の成功により、祖父は東京オリンピックの年、1964年に日本を訪れることができました。

1995年に来日した私の姉は北海道大学薬学部を卒業しました。ヒサオの子供や孫のなかで、最初に日本語が流暢にしゃべれるようになったのは彼女でした。サン・パウロ空港で久しぶりに私たち家族が再会したとき、姉が祖父に日本語でしゃべりかけると、驚いた事に、普段は泣く姿を見せたことのない彼が涙を流しました。

私自身は2002年に来日しましたが、祖父が生まれ育った日本で勉強することは、私にとっては「新世界」の発見でもありました。私は、ブラジルで劇場の舞台デザインにも関わっていたことから、日本では人形浄瑠璃の世界に魅了されました。文楽座の公演に通ううちに、三味線方である鶴澤燕三さん、その妻であり着物姿の素敵な切り絵作家の杉江みどりさん、1994年に人間国宝に認定された人形遣いの吉田簑助さんといった方々にもお目にかかることができました。

吉田簑助さんは人形の繊細な動きによって気持ちや感情を表現されますが、そこには、口数の少なかった祖父の姿が重なって見えます。吉田さんにお話しを伺っていると考えてしまうのですが、カルロスと呼ばれたヒサオが日本にとどまっていたら一体どんな人生を送っていたのでしょうか。

人形遣いの吉田簑助氏（左）と筆者（右）

母が私に授けてくれたカメラは、私にとっての旅立ちを象徴する品となりましたが、当時は、その旅が何処に向かうかは全く想像ができませんでした。そして、私の日本への旅はまだ終わったとは言えないのかもしれません。祖父から始まったブラジルへの旅に思いを馳せるとき、人生航路の不思議さに改めて驚かされます。

・出版物の紹介・

地域研が刊行した出版物と、地域研スタッフが執筆・編集した出版物を紹介します。

CIAS Discussion Paper Series No. 38

世界のエスキス
—地域のカタチを読み解き、地域像を描き出す—

- 谷川竜一編著
- A4 判 58 頁
- 2014 年 3 月

CIAS Discussion Paper Series No. 44

「トルキスタン集成」が拓く世界 III

- 帯谷知可編
- 巻別インデクス CD 版
- 2014 年 3 月

CIAS Discussion Paper Series No. 39

下からの共生を問う
—複相化する地域への視座—

- 王柳蘭編著
- A4 判 120 頁
- 2014 年 3 月

JCAS Collaboration Series No. 8

日中関係の質的変容をどう理解するか
—他地域の視点から捉え直す—

- 塩谷昌史・高橋五郎・貴志俊彦編
- 発行者：地域研究コンソーシアム、地域研、愛知大学国際中国学研究センター、同愛知大学国際問題研究所
- A4 判 76 頁
- 2014 年 3 月

CIAS Discussion Paper Series No. 40

『カラム』の時代 V
—近代マレー・ムスリムの日常生活—

- 坪井祐司・山本博之編著
- A4 判 42 頁
- 2014 年 3 月

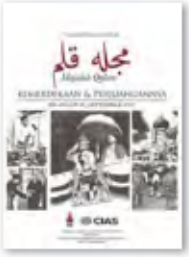
大陸部東南アジア上座仏教徒における実践の時空間マッピング／ Mapping Practices among Theravadins of Southeast Asia in Time and Space

- 発行者：チュラロンコーン大学社会調査研究所
- 185 頁
- 2014 年 1 月

CIAS Discussion Paper Series No. 41

The Role of Japanese Foreign Direct Investment in Production Networks in Mexico and Thailand
—The Transport Equipment Sector—

- Melba Falck Reyes
- A4 判 22 頁
- 2014 年 3 月



資料集
Majalah Qalam

- 発行者：KLASIKA MEDIA-AKADEMI JAWI MALAYSIA & CIAS
- 計 5 冊発行

CIAS Discussion Paper Series No. 42

宗教実践を可視化する
—大陸部東南アジア上座仏教徒の寺院と移動—

- 林行夫・柴山守・Julien Bourdon-Miyamoto・長谷川清・小島敬裕・小林知・高橋美和・笹川秀夫・土佐桂子・須羽新二著
- A4 判 150 頁
- 2014 年 3 月

La actualidad política de los países andinos centrales

- Yusuke Murakami (ed.)
- 発行者：Instituto de Estudios Peruanos
- 2014 年 2 月

CIAS Discussion Paper Series No. 43

Lịch Sử Hình Thành Cư Dân Đô Thị Hà Nội
—ハノイ都市形成史—

- 桜井由躬雄・Nguyen Thi Phuong Anh・柳澤雅之編著
- A4 判 98 頁
- 2014 年 3 月

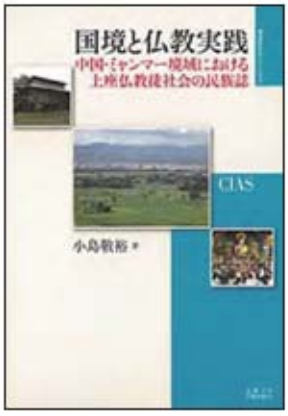
中国占領地の社会調査 II（政治・経済編）第 28 巻～第 36 巻（都市インフラ調査①～⑨）

- 貴志俊彦監修
- 発行者：近現代資料刊行会
- A5 判上製・全 5,700 頁・定価 170,000 円（税別）
- 2014 年 2 月

自著を語る

書籍情報 『国境と仏教実践 中国・ミャンマー境域における上座仏教徒社会の民族誌』（地域研究のフロンティア 3）

小島 敬裕 著（京都大学学術出版会、2014 年、330 頁）



本書は、中国とミャンマーの国境地域における徳宏タイ族の仏教実践を、国境の地域社会や複数の政治権力との関わりから明らかにした民族誌的研究です。従来の上座仏教徒社会研究が、戒律を厳守する出家者を宗教実践にとって不可欠の存在としてきたのに対し、本書では、在家者が中心となって営まれる多様な実践のあり方を描いています。本書の特徴としては、主に以下の 3 点が挙げられます。

まず、外国人による調査の困難な国境地域の農村で長期定着調査を実現したことです。これは、現地の諸機関との間に信頼関係を築いてくださった諸先輩方の恩恵を受けて可能となったものです。

次に、以上の質的調査の後、調査村周辺地域で仏教関係 118 施設における量的調査を行い、地域情報学の手法を援用してデータを可視化した点です。その結果、上座仏教徒社会の他地域との実証的な比較研究や、国境を越える寺院・出家者ネットワークの可視化が実現しました。これは科研「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング：寺院類型・社会移動・ネットワーキング」（研究代表者：林行夫・地域研）や地域研の地域情報学プロジェクトによる成果です。

さらに、QR コードを利用して動画資料の一部を閲覧可能にし、文字で書かれた民族誌と、現場の音や動きを伝える映像をリンクさせたことが挙げられます。この民族誌のスタイルは、まだ実験的な段階にありますが、今後、上座仏教徒社会の他地域でも動画資料を蓄積していくことにより、宗教実践の中の音や動きに関する地域間比較も可能になると考えています。

書籍情報 『少数民族教育と学校選択 ベトナム－「民族」資源化のポリティクス』（地域研究のフロンティア 4）

伊藤 未帆 著（京都大学学術出版会、2014 年、400 頁）

私たちの暮らす世界は、さまざまな見えない境界によって区切られています。日常生活のなかで、これらの境界の存在が意識されることはあまり多くはありません。なぜならば、これらの境界とは、他者とのより良い関係を求めて、作られては消えていき、ときに互いに重なり合いながら、絶えず引き直されていくものだからです。ところが、なんらかの契機によって、この境界が資源分配の経路として用いられるようになったとき、可変的で状況的な境界は固定化されるとともに、この境界をめぐって、さまざまな立場や状況に応じた資源獲得戦略が繰り広げられていきます。

本書は、多民族国家ベトナムの現代史を、さまざまな主体による、「民族」をめぐるアイデンティティ・ポリティクスという観点から読み解きます。脱植民地化の過程で、ベトナムは、54 の公定「民族」という公的な区分を用いて、多様な属性からなる人々を動員していきました。ところが 1990 年代初頭以降、この「民族」を入学資格とする「民族寄宿学校」が全国各地に整備されると、今度はこの学校制度の運営を担った各地方政府や、より良い教育機会の獲得を夢見た人びとの側から、自らの資源獲得の手段として「民族」の境界を積極的に利用する動きが生じていきました。本書では、かつて脱植民地化の過程で「ベトナム国民」への参加資格として作り上げられた「民族」という境界が、その後の社会変化のなかで、地方政府や地域社会に暮らすさまざまな人々によって主体的に再解釈され、国家からの資源分配を得るための資源として利用されるようになっていくプロセスを解き明かしていきます。

新刊紹介

「マンガミュージアムへ行こう」

マンガミュージアムに行かれたことはありますか？　日本にはマンガに関連した数多くのミュージアムが存在します。本書は、日本はもちろん、世界の代表的なマンガミュージアムの中から25館ほど取り上げ、「マンガの仕組みを知る」「絵を楽しむ」「作者を知る」「読む」「買う」「マンガの世界に入る」「海外のマンガミュージアム」という7つの視点で論じたものです。

本書の特徴は、マンガミュージアムのガイドブックとして使えるだけでなく、マンガ研究、メディア研究、建築学、博物館学などの研究者が、先の観点から各ミュージアムを批評していることです。複製される大衆的娯楽メディアとして、美的に鑑賞する絵画美術として、あるいは読むことのできる物語文化として、はたまた現実と空想が交錯するワンダーランドとして、マンガは多様な側面を持っています。そんなマンガの特性に応じてミュージアムも百花繚乱、個性屹立しています。しかもマンガ家という職は、手塚治虫以来、高い職能として一般的に認められるようになりました。そのため、マンガ家を輩出した地域にとっては、マンガ家は偉人として顕彰しうる存在でもあります。地域のマンガ家の顕彰館としても、マンガミュージアムは増えており、その背景にはこうした理由もあるわけです。このように、マンガミュージアムは、展示や所蔵、誕生の仕方に、必然的に多様なありようを示すのであり、言ってみればポピュラー文化と地域が交錯する、地域研究の現場としても成立すると考えています。

本書の研究は、地域研の共同利用・共同研究プロジェクトにおける個別研究ユニット（代表：山中千恵・仁愛大学）の一環としても進められてきました。高校生向けのジュニア新書として出版したことも、マンガの明日を担う若い世代と共に、これからの地域におけるマンガミュージアムを考えていきたいからでもあります。どうか、ご一読下されば幸いです。

（谷川 竜一）

JCAS NEWS

地域研究コンソーシアム（JCAS）年次集会のご案内

今年度、地域研究コンソーシアム（JCAS）は設立10周年の節目を迎えました。この4月から運営体制は第6期に入り、宮崎恒二会長（日本マレーシア学会）、宮原暁運営委員長（大阪大学グローバルコラボレーションセンター）のもとで活動が展開されています。2014年8月末現在、97の組織が加盟しています。

JCASの年次集会は多様な地域研究機関・組織や研究者の出会いの場ともなっています。今年は10月31日（金）～11月1日（土）、日本貿易振興機構アジア経済研究所（千葉市美浜区）にて開催されます。総会と一般公開シンポジウム「地域から研究する産業・企業：フィールドワークとディシプリン」のほか、次世代ワークショップ「アフリカにおける開発と障害」が行われます。また、総会では、第4回地域研究コンソーシアム賞（研究作品賞、登竜賞、研究企画賞、社会連携賞）の審査結果が公表され、授賞式が行われる予定です。

JCASでは、次世代支援、共同企画研究、共同企画講義、オンデマンド・セミナー、学会連携、特定課題研究などの公募プログラムを展開しています。ぜひ応募をご検討ください。

週1回のペースでメールマガジンJCAS Newsも配信しています。地域研究関連のイベント・公募・出版物情報などをいち早くお届けしています。配信申込みは、jcasnews-join@jcas.jpへ本文なしのメールをお送りください。その他、JCASの活動の詳細については、ぜひホームページ（http://www.jcas.jp/）をご覧ください。

（帯谷 知可）

表紙写真について

摩文仁（まぶに）の丘にある平和祈念公園内では、毎年6月23日の「慰霊の日」に沖縄全戦没者追悼式が行われる。この公園には、沖縄戦などで亡くなった人々の氏名を刻んだ平和の礎、国立沖縄戦没者墓苑、沖縄県平和祈念資料館がある。平和の意味、そのありがたさを感じるためにも、この公園を訪れてほしい。

京都大学地域研究統合情報センター
ニューズレター　No.15

●発行日　2014年9月30日

●発行者
京都大学地域研究統合情報センター
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
Tel：075-753-7302
Fax：075-753-9602
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/

●編集責任　福田宏
●編集協力・表紙デザイン　川島淳子